

スニギリョヴァ、スヴェトラナ・ドミートリエヴナ 博士候補(кандидат наук、ロシア、モスクワ)

F・M・ドストエフスキイの土壌主義思想のコンテクストからみた教会分裂

分離派はF・M・ドストエフスキイの創作上もっとも重要なテーマのひとつであり、それは民衆とその精神的発展に対する作家の関心に起因している。こういう周縁的文化現象に関するドストエフスキイの理解は、ロシアデモクラシー思想の発展と結びついている。民衆の歴史の復元と国民的特質の認識を目指す知識層の民衆に対する関心は、その結果として生まれたものである。

F・M・ドストエフスキイの運動としての古儀式派理解には、知的活動や生活刷新を渴望するロシア民衆の精神的プロテストが表れており、分離派がロシア史の中心的原動力の一つであり民衆の反抗的傾向の現れと考えるA・P・シャーポフのデモクラシー観の影響が多くの点にみられる。

歴史と民衆の発展的特質に関するシャーポフの観点への作家の共感、彼の1840年代のペトラシェフスキイ一派への帰属で説明できるが、そこでは分離派(特に共同体制度)の肯定的発展傾向が論議され、同時にその革命的ポテンシャルの問題も検討された。しかしながら分離派のデモクラシー観とF・M・ドストエフスキイの近似性はその無条件的承認を意味するわけではなく、そのことはA・P・シャーポフの結論の正しさを実地で検証した革命家-民主主義者の活動についての作家の考察に表れている。

F・M・ドストエフスキイの考えによれば、ピョートル一世時代の教会分裂は、知識階級と民衆との分離にみられる文化的分裂の出現によって深まった。作家は自分の作品で特別なテーマを練り上げ、それによって古儀式派とセクトの問題、特にその文化的分裂に伴う意味を中心に彼のロシア史観を提示している。土壌を失いその結果信仰を失った知識階級の代表と、分離派及びセクトのテーマに直接間接に結びついた民衆に出自を持つ主人公たちとの衝突を通して、F・M・ドストエフスキイは歴史的過程の本質をみる自分の見方を象徴的に表し、知的エリートと民衆との団結によって西欧の無神論と社会主義思想に対峙する正教の理想を確立しようとしている。この考えは、カトリック教とそのアンチキリスト的出自の批判につながる西洋キリスト「教会」の分裂のテーマを、いくつかの作品の主題として導入することによって深められている。

国家的抑圧、教会の権威失墜とヨーロッパ的形態の啓蒙に対する民衆の反抗として理解できる教会分裂は、F・M・ドストエフスキイの歴史哲学体系の中心要素であり、彼は、西欧派とスラブ派の思想的制約を克服しA・P・シャーポフが労作で示した分離派の民主主義思想を吸収理解して歴史過程の独自のモデルを作り上げたのである。宗教的分裂の問題の作家による解決は、土壌主義的イデオロギーによって行われた。それには民衆の精神的啓蒙のみならず、分離派も含めた民衆の肯定的特質の理解を条件とするインテリゲンチヤと民衆の隔絶の克服が必要となる。なぜなら分離派教徒こそ、F・M・ドストエフスキイによれば、宗教感情の深さと正教の理想の純粋さを守ってきたロシアの民衆の最も進歩的な部分なのだから。(訳 きのしたはるえ)